

[調査研究報告 2]

イスタンブルにおけるビザンツ歴史遺産

教会・修道院を中心に

井上浩一
(大阪市立大学)

はじめに

COE-Aチームの共同研究の一環として8月末から9月初めにちょうど1週間、トルコのイスタンブルに出張させていただきました。日程はお手元の配布資料にあるとおりです(註1)。書斎派と称しているだけのことはあって、専門としているイスタンブルになんと23年ぶりの訪問でした。

今回の出張では、イスタンブルに残るビザンツ時代の文化遺産の他、現代イスタンブル市の観光開発も調査するはずでしたが、途中体調を崩したこと、気候が急変して、冷たい雨となったこともあって、後者は断念しました。結局、トプカプ宮殿や、ブルー・モスク、グラド・バザール、ボスフォロス海峡クルーズといった観光地には行かずじまいです。もっとも名宝「トプカプの短剣」などは、日本におけるトルコ年の記念事業として開催されている「トルコ三大文明展」のため来日中、日本で見られます。すでに東京での展覧会は終わり、現在は福岡で開催中、12月には大阪歴史博物館に来ます。

本日の報告は時間的な制約もあり、ビザンツ時代の遺跡のうちでもとくにキリスト教的性格がはっきりしている、いいかえれば現代のトルコとは異質である、教会と修道院を中心に、ビザンツの文化遺産の現状について報告させていただきます。結論だけ申しますと、トルコにおけるビザンツ時代への関心は23年前と比べて飛躍的に高まっています。

1 博物館となった教会・修道院

ビザンツ時代のコンスタンティノープル（現イスタンブル）には多数の教会・修道院が存在しました。オスマン・トルコに征服される少し前、15世紀のはじめにこの町を訪れたスペイン人クラヴィホは、3000の教会があると記しています（註2）。3000という数はもちろん誇張でしょう。ちなみに、現代の研究者が作成したコンスタンティノープルの教会・修道院リストでは1000を少し越える数となっています（註3）。これはビザンツ時代を通じて資料に出てくるものをすべて数えたものですから、同一の時点でこれら1000の教会が存在したというわけではありません。その上、郊外の教会も含めていますし、重複もあるようです。ただし、記録には残っていない小さな教会・修道院も相当数あったでしょうから、コンスタンティノープルが多数の教会・修道院が立ち並ぶ壮麗な宗教都市だったことは間違いありません。

イスラーム教徒トルコ人による征服後、異教の施設である教会・修道院は破壊を免れませんでした。たとえば、歴代ビザンツ皇帝の墓のあった聖使徒教会は取り壊され、そのあとに征服者メフメト2世のモスク（ファティーフ・モスク）が建てられました。しかしながら、モスクに転用するなどのかたちで、一部の教会・修道院の建物は残りました。聖ソフィア教会はその代表例です（註4）。聖ソフィア教会は、メフメト2世によってモスクに変えられ、内部のモザイク壁画は漆喰で塗りつぶされてしまいました。19世紀に調査をしたスイス人フォサーティ兄弟がモザイクの存在を確認し、1930年代にアメリカのビザンツ研究所のチームが、漆喰のなかから美しいモザイクを甦らせました。1935年にはアタチュルクの決断で、博物館へとまたも姿を変えることとなります。現在のアヤソフィヤ博物館、イスタンブルの観光名所です。アヤソフィヤではその後も調査・補修が継続的に行なわれており、1990年からは、科学研究費による日本の調査団も入っております（註5）。私が行ったこの夏も、内部・外部の補修・調査が行なわれていました。【図版2 - 1】【図版2 - 2】

他にも、ビザンツ時代の文化遺産の修復作業が市内のあちこちで行なわれていました。ここにもビザンツ時代の文化財への関心の高さを窺うことができます。もっとも、それもまた今回の調査が不十分に終わった一因でしたが、「コンスタンティヌスの柱」も修復中で

した【図版2 - 3】。コンスタンティノープルをローマ帝国の新しい都としたコンスタンティヌス1世(在位306~37年)が、広場の中央に建て、みずからの像をその頂上に飾った大理石の柱です。もともと50mの高さがありました。火事に遭い、鉄板の帯で補強されて、トルコ語では「チェンベルリタシ(焼けた柱)」と呼ばれています。同様に、テオドシウスの大城壁も、継続的に修復がなされており、私が訪ねた時には金角湾に近い地区で修復が行なわれていました。【図版2 - 4】

聖ソフィア教会に倣って、その後いくつか、いったんモスクに変えられたビザンツ時代の教会・修道院が、トルコ共和国文化観光省ないしアヤソフィア博物館の管轄下に移され、博物館に変えられました。もっとも有名なのはカーリエ・モスクでしょう。ビザンツ時代のコーラ修道院がモスクとされたものですが、美しいモザイク画とフレスコ画が残されており、早くから博物館として公開されてきました。博物館らしく、照明方法にも配慮がなされています【図版2 - 5】。カーリエ博物館もイスタンブル観光の名所で、近くにはカフェや土産物屋などが並んでいます。

他にも、末期ビザンツの代表的建築物であるパンマカリストス教会であったフェティエ・モスクも、現在では博物館を兼ねていますし【図版2 - 6】、コンスタンティノープルの伝統ある修道院、ストゥディオンの聖ヨハネス修道院であったイムラホル・モスクも、アヤソフィア博物館の管轄となっています。モスクではなく武器庫として利用されていた聖エイレーネー教会も、アヤイリニ博物館とされています。ただし、アヤイリニの場合、モザイク壁画のような観光資源がないためでしょうか、臨時の展覧会などに利用されるようで、今回訪ねた時には閉館中でした。

宗教施設であるモスクを博物館に変えるのは観光開発の一環でしょうが、それを可能にしているのは、トルコ共和国が進めてきた政教分離政策かと思われます。ただ博物館と申しましても、モスクから転用されたイスタンブルの博物館は、その史跡の歴史などの説明はあまり行なっていません。わずかに、アヤソフィアの2階の回廊で、「聖ソフィア教会

帝国の幻想 (Hagia Sophia: A Vision of Empire)」というパネル展示を行なっていた程度でした。のちに述べますように、各教会・修道院の遺物や歴史の説明は、考古学博物館でまとめて行なわれているようです。しかしながら、遺物・遺構のあるその場所で、歴史的背景などの説明があれば、史跡に対する興味や理解もいっそう増すに違いありません。せっかく博物館としたからには、それなりの実質も伴うよう、史跡そのものを損なわ

ない範囲内で工夫して欲しいところです。いずれにしましても、文化財・遺跡と博物館を組み合わせ、観光客や市民に豊かな歴史像を提供することは、イスタンブルだけの課題ではないと思われます。

2 モスクとして用いられている教会・修道院

モスクとして使用され続けているビザンツ教会・修道院もかなりあります。今回訪問したモスクは次の通りです。配布しました地図もご参照ください。【図版2 - 20】

エスキ・マレト・モスク = パンテポプテース教会

カレンデルハネ・モスク = アカタレプトス修道院附属教会(？)

キュチュク・アヤソフィヤ・モスク = 聖セルギオス・バッコス教会

ギュル・モスク = 聖テオドシア教会(？)

キリセ・モスク = 聖テオドロス教会

ケフェリ・モスク = マヌエル修道院(？)

コジャ・ムスタファ・パシャ・モスク = 聖アンドレイア教会

フェナリ・イサ・モスク = リプス修道院附属教会

ボドルム・モスク = ミュレライオン修道院附属教会

モラ・ゼイレク・モスク = パントクラトル修道院附属教会

一例として、カレンデルハネ・モスクの外観と内部の様子をごらんください【図版2 - 7】
【図版2 - 8】。これらのモスクのうち、金角湾に近いギュル・モスク【図版2 - 9】は、ビザンツ時代の聖テオドシア教会であるといわれ、女性聖人テオドシアの殉教の逸話に、ギュル(薔薇)という名前もあいまって、最近は観光客も来るようです。日本で刊行されているイスタンブル紀行にも取り上げられるようになりました(註6)。イスラーム教徒でない者向けの注意書きが入口に掲げられていたのも、そのためでしょうか。女性はスカーフをつけるようとの指示がありました。ただし、この建物がかつての聖テオドシア教会かどうか、疑問も出されており、確定するには本格的な調査が必要でしょう(註7)。

ビザンツ時代の教会・修道院を転用したモスクのなかには荒れているものもあります。キリセ・モスク(聖テオドロス教会)の場合、内部は整備されていましたが、外観はごら

んの通りです【図版2 - 10】。エスキ・マレット・モスクは改修中でした。周りは貧民街で、モスクに接するように家が建て込んでいます。同様に、私の目には、ビザンツの文化財がなんともったいない、というような状態のモスクもいくつかありました。

モスクとしての利用を優先させ、ビザンツ時代の面影が薄れてしまったものもいくつかあります。私が泊まりましたホテルのすぐそばのボドルム・モスク（地下室モスク）もそうです。もとは10世紀の皇帝ロマノス1世が建てたミュレライオン修道院の付属教会で、中期ビザンツの貴重な建築物です。1911年に火事に遭ったのち放置されていましたが【図版2 - 11】、1960年代に調査が行なわれ、それに基づいた詳細な研究書も刊行されました（註8）。しかしこの貴重な文化遺産は、調査ののち、やはりモスクとしての利用を優先させたようです。全面的な修復がなされ、スピーカーやエアコンまでつけています【図版2 - 12】。内部には、このような工事をして立派なモスクになったと写真入の説明がありました。

モラ・ゼイレク・モスクでも何度か修復が行なわれてきました。同モスクは、12世紀に建てられたパントクラートル修道院の建物を転用したものです。3つの教会・聖堂の複合体ですが、現在モスクとして使用されているのは南の旧教会だけで、中央部の聖ミカエル聖堂はなお修復工事中でした。カーリエ博物館に倣って、イスタンブル観光の目玉とするつもりようです。建物の前面は、かつて建ち並んでいた小家屋【図版2 - 13】を撤去して、きれいな庭園になっており、カフェテラスが営業しています【図版2 - 14】。金角湾の向こうに新市街が広がり、壮麗なスレイマニエ・モスクも見えて、眺めは最高です。パントクラートルは、ビザンツ皇帝ヨハネス2世（在位1118～43年）の妃、ハンガリー王女ピロシュカ（ギリシア名エイレーネー）ゆかりの修道院で、ビザンツ末期の皇帝たちが葬られておりますし、どのような修道生活を送られていたのかを伝える記録も残っていますから、いずれは多くの観光客を迎えるようになるかもしれません。（註9）

3 考古学博物館のビザンツ遺跡展示

先ほども申しましたように、旧ビザンツ教会・修道院から出土した遺物の多くは、トプカプ宮殿横の考古学博物館に収められています。イスタンブル考古学博物館は、トルコの歴史遺産はもちろん、かつてトルコ支配下にあった中近東地域の出土品や文化財を多数所

蔵していることで有名で、大英博物館やメトロポリタン美術館などと並ぶ世界有数の博物館です。もっともビザンツ時代への配慮はまだ充分ではありません。本館の前に置かれている緋紫色の石棺は、ビザンツ皇帝の遺体が納められていたものですが(註10)、展示室のガラスケースに収められ、観光客を集めている「伝アレクサンドロス大王の石棺」に比べると、随分ぞんざいに扱われています。私が訪れた時には、初秋の雨に打たれて、紫色が真っそう鮮やかでした。【図版2 - 15】

とはいえ、1980年にイスタンブルを訪れた時には、考古学博物館も市立博物館も、ビザンツ時代にはほとんど関心がなく、展示も貧弱とすら言えないような有様でしたが、今回、考古学博物館を訪れますと、皇帝の石棺はともかく、ビザンツ時代のイスタンブルに対する扱いがすっかり変わっていました。新館2階のイスタンブル市の歴史展示“*Istanbul through Ages*”は、意外にもビザンツ時代が中心で、隔世の感がします。ビザンツ時代の文化財・遺跡への関心の高まりがよくわかりました。これはイスタンブルだけではなく、トルコ全体の傾向のようです。かつてはトルコの歴史というと、アタチュルクは別格として、ヒットイトとオスマン帝国でしたが、今日本で開催されているトルコ年の記念展覧会は、そこにビザンツを加えて「トルコ三大文明展」と銘打っています。

考古学博物館の展示は、イスタンブル市内にある旧ビザンツ遺跡を網羅的に紹介しています。聖ソフィア教会(現アヤソフィヤ博物館)のような観光スポットとなっているものはもちろん、モスクとして使われ続けている旧ビザンツ教会・修道院など、それほど有名でない、むしろほとんど知られていない建築物・遺跡についても、その歴史を詳しく紹介し、どのような遺物が発見されたのか、現在どうなっているのか、を展示しています。本日の報告では取り上げませんでしたが、宮殿や城壁、水道設備、競馬場などの遺跡の解説、遺物の展示もなされていました。

展示はゆったりとスペースをとって行なわれています。上記のパントクラートル教会についても、修復・調査の際に見つかったステンド・グラスの断片や石棺が展示されていました【図版2 - 16】。解説はトルコ語と英語で詳しくなされており、しかも学問的にきわめて高い水準のものです。先ほど述べましたギュル・モスク(薔薇のモスク)の解説には、近年の学説を取り入れて、聖テオドシア教会ではないと考えられるとありました。あるいは、ポリュエウクトス教会のような、ビザンツ研究者でも一部の美術・建築史家を除けば余りなじみがない、かつ現在は市庁舎が建っていて、遺構もほとんど残っていないものに

ついても、独立のコーナーを設けて説明しています。いずれも私には面白かったのですが、さすがにこんなものに関心を持つ人が他にいるのかな、という疑問はありました。確かに、雨の午前とはいえ、新館2階フロアにはほとんど^{ひとけ}人気がありませんでした。

ギョル・モスクだけではなく、考古学博物館の展示・説明は、国際的なビザンツ研究の最新の成果を取り入れたものです。その背景には、近年のトルコにおけるビザンツ学の発展があります。昨年12月のAチーム第1回研究会でコメント報告しましたように(註11)、1999年にイスタンブルで開催された国際シンポジウム「ビザンツ時代のコンスタンティノープル ― モニュメント・トポグラフィ・日常生活 ―」(註12)は、都市コンスタンティノープル研究の新たな動向だけではなく、トルコにおけるビザンツ学の発展をも示す画期的なものでした。

4 ビザンツ遺跡への関心

ビザンツ時代の遺跡を重視するようになった背景には、現代のトルコ共和国がめざす方向、端的に申しますと「ヨーロッパ志向」があると思われます。具体的にはEU加盟の問題ですが、時間の都合上、今日はお話しできません。ここでは都市イスタンブルに絞って、「ヨーロッパ志向」を生みだしている要因を考えたいと思います。私が注目しているのは、イスタンブル市が2000年のオリンピック以来、4回連続で開催都市に立候補していることです。アヤソフィヤ博物館近くのツーリスト・インフォメーションには、2008年の招致ステッカーがまだ貼られていました。剥がし忘れか、あるいは、イスタンブルは2012年にも立候補していますので、意識的に残しているのかもしれませんが。イスタンブルの招致スローガンは“The meeting of Continents”「大陸の出会い」です【図版2 - 17】。「大陸の出会い」をテーマに、東洋と西洋にまたがる都市を強調しようとするならば、イスラーム都市というだけではなく、西の側面、キリスト教帝国ビザンツの都であった歴史が重要となるでしょう。オリンピック招致運動は、地下鉄の整備 空港と市街中心部が直結されました だけではなく、ビザンツ時代への関心を高めているように感じました。

この「大陸の出会い」というコンセプトは好評でした。財政的に不安がある、施設インフラはだめだ、運営能力も疑問、と言われていたにもかかわらず、イスタンブルは2008

年の開催都市を決める投票でかなりの票を集めました。2001年7月モスクワで行なわれたIOC総会の第1回投票では、大阪が6票しかとれず落選したのに対して、イスタンプルは17票を獲得してパリよりも上位になりました。事前にIOC評価委員会の示した項目別評価では、大阪の方がはるかに高い得点だったのに……、大阪市のオリンピック基本理念策定委員でした私としては釈然としませんが、「大陸の出会い」というイスタンプルの魅力に負けたといったところでしょうか。ちなみに、このあと中野先生から御報告があるバンクーバーは、つい先頃、2010年の冬季オリンピック開催地に選ばれました。選定に際して、歴史遺産はどのように評価されたのか、興味あるところです。

ビザンツ時代への関心は、先に述べましたように、もちろん観光開発と結びついています。イスタンプル市は、アヤソフィヤ博物館（旧聖ソフィア教会）やカーリエ博物館（旧コーラ修道院）以外にも、ビザンツ時代の遺跡を観光の目玉にしようとしているようです。モザイク博物館や地下貯水池はその成功例でしょう。

ブルーモスクのすぐ近くにあるモザイク博物館は、ビザンツ宮殿の床モザイクを公開しているものです。確かに23年前にもモザイクはありました。地下室のようなところに降りて行って、狭い、汚いところで見えた思い出があります。今回訪れますと、明るく広く、立派な博物館になって、宮殿のモザイク床が展示されていました【図版2-18】。新しいモザイク博物館は、オーストリア科学アカデミーが中心となった発掘の成果を公開していません（註13）。しかもこの博物館はバザールの真ん中（真下といったほうが正確）にあります。博物館の建設と平行して、バザールが復活されたのです。遺跡の調査・保存・公開が観光開発と結びついている好例といえましょう。

ほぼ同様の变化をイエレバタン・サライ（沈没宮殿）すなわちユスティニアヌス1世時代（527～565年）の地下貯水池もしていました。こちらにも23年前にはごく一部が公開されていたのですが、1985年から調査・整備が進められ、メドゥーサの石柱が見つかったこともあって【図版2-19】、今では観光名所となっています。メドゥーサの石柱の発見は日本の新聞にも大きく報じられましたので、ご記憶の方もあるかもしれません（註14）。観光客を意識してでしょうか、照明や音楽で雰囲気盛り上げようと工夫しています。そういうカフェもありました。

現在修復が進められている、「コンスタンティヌスの柱」「テオドシウスの城壁」「パントクラートル修道院」なども、より多くの観光客をひきつけることを大きな目的としている

ようです。ただ、観光化をめざすあまり歴史的な正確さを失うのではないかと、不安もあります。テオドシウスの大城壁の修復作業をみますと、城壁の上まで登れるよう階段もつけていましたが、新しい煉瓦を用いての全面改修で、修復というより新築に近いように思われました。【図版2 - 4】

おわりに

こうして、一方においてオリンピック招致運動・EU加盟や観光開発、他方では国際的な都市コンスタンティノープル研究、このふたつの側面からイスタンブル市内のビザンツ時代の歴史遺産への関心は高まっています。そしてそれがまたイスタンブル市を、名実ともに東西世界の出会うところという、より魅力的な街にしていると思われま

す。オリンピック招致では苦杯をなめましたが、大阪は奈良・京都よりも古い都であり、中世には宗教都市として栄え、近世・近代には優れた市民文化を生みました。豊かな歴史遺産、文化の伝統をもつ都市です。その歴史を現代に生かした都市づくり、その要となる新しい都市文化の創造は、大阪の都市としての「格」を高めるとともに、市民のアイデンティティの確立にも寄与するものと思います。今日のミニ・シンポジウムを含めて、私たちCOEの都市文化研究が、魅力的な大阪の街づくりに生かされるよう願って、報告を終えさせていただきます。

註

(1) 調査日程(2003年8月30日~9月6日)は次の通りである。

8月30日 大阪発、夕刻イスタンブル着

8月31日 猛暑。旧市街スルタンアフメット地区(1)

9月1日 猛暑。スルタンアフメット地区(2)、旧市街中央部

9月2日 曇りのち晴れ。旧市街中央部から金角湾地区

9月3日 曇り。旧市街北西部、金角湾地区、新市街ガラタ地区

- 9月 4日 雨、寒い。旧市街南西部、考古学博物館（1）
- 9月 5日 雨、寒い。考古学博物館（2）、夕刻イスタンブル発
- 9月 6日 大阪着、猛暑
- （2）L. ケーレン編『遙かなるサマルカンド』杉山正樹訳、原書房、1998年、75ページ。
- （3）R. Janin, *Le Geographie ecclesiastique de l'Empire byzantin, I: Le siege de Constantinople et le patriarcat oecumenique, 3: Les eglises et les monasteres*, 2nd ed., Paris, 1969.
- （4）聖ソフィア教会については、浅野和生『イスタンブールの大聖堂』中央公論新社、2003年。なお、正教の教会としてビザンツ時代から現在まで存続しているのは、パナギオテイッサ教会（モンゴルのマリア教会）のみである。同教会については R. Janin, *op. cit.*, pp.213-14.
- （5）ハギア・ソフィア学術調査団（代表、日高健一郎）研究成果報告会報告集『Hagia Sophia: Surveying Project』2001年。
- （6）野中恵子『イスタンブール歴史の旅』小学館、2002年、63～64ページ。
- （7）聖テオドシア教会については、*Byzantine Defenders of Images: Eight Saints' Lives in English Translation*, ed., A. -M. Talbot, Washington D. C., 1998, pp.1-7; Th. F. Mathews, *The Byzantine Churches of Istanbul: A Photographic Survey*, University Park and London, 1976, pp.128-39; Janin, *op. cit.*, pp.143-45.
- （8）C. L. Striker, *The Myrelaion (Bodrum Camii) in Istanbul*, Princeton, 1981.
- （9）1997年から98年にかけて屋根部分の修復が行なわれた。M. Ahunbay and Z. Ahunbay, "Restoration Work at the Zeyrek Camii, 1997-1998," N. Necipoglu (ed.), *Byzantine Constantinople: Monuments, Topography and Everyday Life*, Leiden, 2001, pp.117-132. 参照。パントクラートル修道院の規約は、P. Gautier, "Le typikon du Christ Sauveur Pantocrator," *Revue des Etudes byzantines*, 32 (1974), pp.1-145. なお、同修道院に葬られたとの記録がある皇帝は、ヨハネス2世（1143年没）、マヌエル1世（1180年没）、マヌエル2世（1425年没）、ヨハネス8世（1448年没）の4人である。
- （10）イスタンブールで発見されたビザンツ皇帝の石棺については A. A. Vasiliev, "Imperial Porphyry Sacrophagi in Constantinople," *Dumbarton Oaks Papers*, 4 (1948), pp.1-26. を参照。

- (11) 井上浩一「比較都市史におけるコンスタンティノープル 比較都市文化史研究チーム
塚田報告によせて」『都市文化研究』第1号、2003年、145 - 147 ページ。
- (12) シンポジウムの成果は N. Necipoglu (ed.), *op. cit.* として刊行されている。
- (13) 同博物館の歴史、展示については、W. Jobst, B. Erdal and C. Gurtner, *Istanbul: The
Great Palace Mosaic*, Istanbul, 1997. (=モザイク博物館図録) 参照。
- (14) 1988年1月13日『朝日新聞』(大阪)夕刊1面「泥の中から『逆さメドゥーサ』」

井上報告 図版

とくに注記しない限り、写真は今回の調査で井上が撮影したもの。



2-1 アヤソフィヤ博物館（聖ソフィア教会）外観



2-2 アヤソフィヤ博物館
（聖ソフィア教会）内部



2-3 コンスタンティヌスの柱



2-4 テオドシウスの城壁の修復作業



2-5 カーリエ博物館の照明に関する説明



2-6 フェティエ・モスク外観



2-7 カレンダーハネ・モスク外観業



2-8 カレンダーハネ・モスク内部



2-9 ギュル・モスク外観



2-10 キリセ・モスク外観



2-11 1935年のボドルム・モスク

C. L. Striker, *The Myrelaion (Bodrum Camii) in Istanbul* より



2-12 ボドルム・モスク外観（向かって右端は新たに作られた玄関設備）



2-13 1970年頃のモラ・ゼイレク・モスク

Th. F. Mathews, *The Byzantine Churches of Istanbul*より



2-14 モラ・ゼイレク・モスク前のカフェテラス



2-15 考古学博物館本館前におかれているビザンツ皇帝の石棺



2-16 考古学博物館「パントクラートル修道院」展示



2-17 イスタンブール市の2008年オリンピック招致シンボルマーク



2-18 モザイク博物館内部



2-19 地下貯水池の柱に転用されたメドゥーサの石柱